

啄木かるた百首

秋近し！

電燈の球のぬくもりの
さはれば指の皮膚に親しき。

出典「悲しき玩具」

新しき本を買ひ来て読む夜半の
そのたのしさも

長くわすれぬ

出典「二握の砂」

あき風が電車のなかに吹き入れし
柳のひと葉

手にとりて見る

出典「二握の砂」

曠野ゆく汽車のごとくに、
このなやみ、

ときどき我の心を通る。

出典「悲しき玩具」

浅草の夜のにぎはひに
まぎれ入り

まぎれ出で来しさびしき心

出典「二握の砂」

或る時のわれのころを
焼きたての

麺麴に似たりと思ひけるかな

出典「二握の砂」

朝の湯の

湯槽のふちにうなじ載せ
ゆるく息する物思ひかな

出典「二握の砂」

あはれなる恋かなと
ひとり眩きて

夜半の火桶に炭添へにけり

出典「二握の砂」

遊びに出て子供かへらず、
取り出して

走らせて見る玩具の機関車。

出典「悲しき玩具」

呼吸すれば、
胸の中にて鳴る音あり。

冴よりもさびしきその音！

出典「悲しき玩具」

新しき明日の来るを信ずといふ
自分の言葉に

嘘はなけれど――

出典「悲しき玩具」

石をもて追はるることく
ふるさとを出でしかなしみ

消ゆる時なし

出典「二握の砂」

あたらしき心もとめて
名も知らぬ

街など今日もさまよひて来ぬ

出典「二握の砂」

いつとなく我にあゆみ寄り、
手を握り、

またいつとなく去りゆく人人！

出典「悲しき玩具」

あたらしきサラダの色の
うれしさに、

箸とりあげて見は見つれども――

出典「悲しき玩具」

いつも逢ふ電車の中の小男の
稜ある眼

このごろ気になる

出典「二握の砂」

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと

握れば指のあひだより落つ

出典「二握の砂」

岩手山

秋はふもとの三方の
野に満つる虫を何と聴くらむ

出典「二握の砂」

うす紅く雪に流れて
入日影

曠野の汽車の窓を照せり

出典「二握の砂」

愁ひ来て
丘のほれば

名も知らぬ鳥啄めり赤き茨の実

出典「二握の砂」

遠方に電話の鈴の鳴ることく
今日も耳鳴る

かなしき日かな

出典「二握の砂」

大いなる水晶の玉を
ひとつ欲し

それにむかひて物を思はむ

出典「二握の砂」

己が名をほのかに呼びて
涙せし

十四の春にかへる術なし

出典「二握の砂」

かにかくに洪民村は恋しかり
おもひでの山

おもひでの川

出典「二握の砂」

かの家のかの窓にこそ
春の夜を

秀子とともに蛙聴きけれ

出典「二握の砂」

かの時に言ひそびれたる
大切の言葉は今も

胸にのこれど

出典「二握の砂」

かの年のかの新聞の
初雪の記事を書きしは

我なりしかな

出典「二握の砂」

神のごと
遠く姿をあらはせる

阿寒の山の雪のあけぼの

出典「二握の砂」

考へれば、
ほんとに欲しと思ふこと有るやうで無し。

煙管をみがく。

出典「悲しき玩具」

閑古鳥――

洪民村の山莊をめぐる林の
あかつきなつかし。

出典「悲しき玩具」

汽車の窓
はるかに北にふるさとの山見え来れば

襟を正すも

出典「二握の砂」

気の変る人に仕へて
つくづくと

わが世がいやになりにけるかな

出典「二握の砂」

君に似し姿を街に見る時の
ころろ躍りを

あはれと思へ

出典「二握の砂」

教室の窓より通げて
ただ一人

かの城址に寝に行きしかな

出典「二握の砂」

今日もまた胸に痛みあり。
死ぬならば、

ふるさとに行きて死なむと思ふ。

出典「悲しき玩具」

霧ふかき好摩の原の
停車場の

朝の虫こそすすろなりけれ

出典「二握の砂」

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に

われ見送りし妻の眉かな

出典「二握の砂」

こほりたるインクの罌を
火に翳し

涙ながれぬともしびの下

出典「二握の砂」

こころよき疲れなるかな
息もつかず

仕事をしたる後のこの疲れ

出典「二握の砂」

こころよく
我にはたらく仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思ふ

出典「二握の砂」

不來方のお城の草に寝ころびて
空に吸はれし

十五の心

出典「二握の砂」

こみ合へる電車の隅に
ちぢこまる

ゆふべゆふべの我のいとしさ

出典「二握の砂」

さいはての駅に下り立ち
雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

出典「二握の砂」

さらさらと氷の屑が
波に鳴る

磯の月夜のゆきかへりかな

出典「二握の砂」

さりげなく言ひし言葉は
さりげなく君も聴きつらむ

それだけのこと

出典「二握の砂」

潮かをる北の浜辺の
砂山のかの浜薔薇よ

今年も咲けるや

出典「二握の砂」

叱られて
わつと泣き出す子供心

その心にもなりてみたきかな

出典「二握の砂」

しつとりと
なみだを吸へる砂の玉

なみだは重きものにしあるかな

出典「二握の砂」

師も友も知らで責めにき
謎に似る
わが学業のおこたりの因

出典「握の砂」

しらしらと氷かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

出典「握の砂」

しんとして幅広き街の
秋の夜の
玉蜀黍の焼くるにほひよ

出典「握の砂」

水晶の玉をよろこびもてあそぶ
わがこの心
何の心ぞ

出典「握の砂」

吸ふごとに
鼻がびたりと凍りつく
寒き空気を吸ひたくなりぬ

出典「握の砂」

砂山の砂に腹這ひ
初恋の
いたみを遠くおもひ出づる日

出典「握の砂」

宗次郎に
おかねが泣きて口説き居り
大根の花白きゆふくれ

出典「握の砂」

そのかみの学校二のなまけ者
今は真面目に
はたらきて居り

出典「握の砂」

その頃は気もつかざりし
仮名ちがひの多きことかな、
昔の恋文！

出典「悲しき玩具」

その昔
小学校の柂屋根に我が投げし鞠
いかにかなりけむ

出典「握の砂」

高山のいただきに登り
なにがなしに帽子をふりて
下り来しかな

出典「握の砂」

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕

出典「握の砂」

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三步あゆまず

出典「握の砂」

たんたらたらたんたらたらと
雨滴が
痛むあたまにびびくかなしき

出典「握の砂」

手套を脱ぐ手ふと休む
何やらむ
こころかすめし思ひ出のあり

出典「握の砂」

手も足も
室いっぱいに投げ出して
やがて静かに起きかへるかな

出典「握の砂」

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

出典「握の砂」

何処やらに沢山の人があらそひて
鬩引くごとし
われも引きたし

出典「握の砂」

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ来て
妻としたしむ

出典「握の砂」

長く長く忘れし友に
会ふごとき
よろこびをもて水の音聴く

出典「握の砂」

なつかしき
故郷にかへる思ひあり、
久し振りにて汽車に乗りしに。

出典「悲しき玩具」

何事も金とわらひ
すこし経て
またも俄かに不平つり来

出典「握の砂」

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ
汽車を下りしに
ゆくところなし

出典「握の砂」

何となく、
今年はいし事あるごとし。
元日の朝、晴れて風無し。

出典「悲しき玩具」

西風に
内丸大路の桜の葉
かさこそ散るを踏みてあそびき

出典「握の砂」

庭のそとを白き犬ゆけり。
ふりむきて、
犬を飼はむと妻にはかれる。

出典「悲しき玩具」

寝つつ読む本の重さに
つかれたる
手を休めては、物を思へり。

出典「悲しき玩具」

函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌
矢ぐるまの花

出典「握の砂」

はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ちつと手を見る

出典「握の砂」

馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に

出典「握の砂」

晴れし空仰げばいつも
口笛を吹きたくなりて
吹きてあそびき

出典「握の砂」

ひとがみな
同じ方角に向いて行く。
それを横より見てゐる心

出典「悲しき玩具」

ひとしきり静かなになれる
ゆふぐれの
厨にのこるハムのにほひかな

出典「握の砂」

人といふ人のところに
一人つつ囚人がゐて
うめくかなしき

出典「握の砂」

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

出典「握の砂」

ふるさとの山に向ひて
言ふごとなし
ふるさとの山はありがたきかな

出典「握の砂」

頬につたふ
なみだのごはず
一握の砂を示しし人を忘れず

出典「握の砂」

まれにある
この平なる心には
時計の鳴るもおもしろく聴く

出典「握の砂」

みぞれ降る
石狩の野の汽車に読みし
ツルゲエネフの物語かな

出典「握の砂」

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

出典「握の砂」

目の前の菓子皿などを
かりかりと噛みてみたくなりぬ
もどかしきかな

出典「握の砂」

盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

出典「握の砂」

病のごと
思郷のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

出典「握の砂」

山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君を思へり

出典「握の砂」

やはらかに積れる雪に
熱てる頬を埋むるごとき
恋してみたし

出典「握の砂」

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けごときくに

出典「握の砂」

よく叱る師ありき
髯の似たるより山羊と名づけて
口真似もしき

出典「握の砂」

よごれたる手を洗ひし時の
かすかなる満足が
今日の満足なりき。

出典「悲しき玩具」

夜寝ても口笛吹きぬ
口笛は
十五の我の歌にしありけり

出典「握の砂」

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のことなど
思ひ出づる日

出典「握の砂」

わがために
なやめる魂をしづめよと
讚美歌うたふ人ありしかな

出典「握の砂」

わかれ来てふと瞬けば
ゆくりなく
つめたきものの頬をつたへり

出典「握の砂」